NOTEBOOK

あるべき未来に進むために

A 普通横罫 40枚 ノ-200PX

NOVEL

余話　天使を見た日

芳流（kaoru）

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=18672211

ダイの大冒険, アバン, ヒュンケル, ロカ, レイラ, 子ヒュン, マァム, ヒュンマ

突発のおまけ話。
子ヒュン＆アバン先生inネイル村atロカさんち。
子ヒュンとちびまむです。
「あるべき未来に進むために」の「７」novel/15406332の間に入る話。

10/4が天使の日だと聞き、ネタは組んでいたんですが、書く暇がなく、やっと仕上がりました。
例のオバケが出てくるので、このシリーズに。

「村のくらし」シリーズ「聖人は貧者にマントを与ふ」novel/16233299と繋がっていると言えなくもない…です。

余話　天使を見た日

　世の中を渡っていくためには、学力も一つの武器になる。
　アバンは、ヒュンケルと旅をするようになってから、剣術や戦う術だけではなく、読み書きや計算も教えていた。
　思いのほかヒュンケルの理解がよかったことに気をよくしたアバンは、どんどん、自分の持つ知識を彼に教えるようになっていった。
　この日も、滞在していたネイル村のロカの自宅のリビングで、アバンは、ヒュンケルに、数学を教えていた。その二人の上空を、ゴーストのバケルが、あくびをしながらふわふわと漂っていた。
　家主のロカは、げんなりした顔で、ヒュンケルの手元のノートをのぞき込んでいた。
　ロカは、アバンに尋ねた。
「・・・おい、アバン、お前、こんな難しいの、コイツに教えてるのか？」
　すると、何でもないことのように、アバンは答えた。
「ええ。
　ヒュンケルは呑み込みがいいんですよ。」
　ロカは、今度は、少年に尋ねた。
「坊主、お前も、これが解るのか・・・？」
「・・・先生の説明を聞けば、何とか。」
　アバンは、ヒュンケルの手元の計算式を確認しながら、ロカに答えた。
「これはただの数の性質を利用した計算ですからね。
　こういった計算とか、簡単な図形の利用とか、知っておくと、応用しやすいんですよ。特に、軍事関係にはね、いろいろな知識が役に立ちますからね。」
「・・・俺は御免だな・・・。」
　ロカは、そう言ってぼやいた。
　すると、リビングに、場違いに明るい声が飛び込んできた。
「とーたん！

しぇんしぇー。
にいにー！！」
見ると、この家の一人娘のマァムが、満面に喜色を湛えて、彼らに駆け寄ってきた。
だが、彼女の様子は常とは異なっていた。普段とは全く異なる衣装を身にまとっている。
娘を溺愛しているロカは、立ち上がると、両手を広げてマァムを出迎えた。
「おおっ！マァム！！可愛くなったな！！」
ロカの腕の中に飛び込んだマァムは、力強い腕に抱きかかえられ、満足そうに笑みを浮かべた。
アバンも席を立つと、顔をほころばせ、ロカに抱き上げられたマァムに声をかけた。
「おや、かわいいですねえ、マァム。
天使ですか？」
「うんっ！！」
幼いマァムは、真っ白なワンピースを着ていた。そして、その背中には、小さな羽がついていたのだ。
鳥の羽のような純白の翼は、マァムの纏うワンピースの後身頃に縫い付けられていた。
柔らかい花の色の髪のマァムに、純白の衣装はよく似合っており、天上から舞い降りた天使そのもののように思えた。
「こらっ、待ちなさい！マァム！！」
マァムの後から、レイラが娘を追いかけてきた。
レイラは、ロカに抱き上げられたマァムを認めると、幼い娘に注意をした。
「走っていっちゃだめでしょう。転んじゃうし、お衣装、汚しちゃうわよ。借りたものなのよ。」
「はーい。」
母に叱られたマァムは、口を尖らせながらも、素直に詫びた。
アバンはレイラに尋ねた。
「可愛いですねえ。天使の衣装ですか？」
レイラは頷いて、アバンに答えた。

「ええ、そうなんです。
　以前、都のお祭りのときに、村の子が着たものなんです。
　マァムにちょうどいいんじゃないかって、お借りしたんですけど、この子がすっかりはしゃいじゃって。」
　レイラが困ったような顔をしたが、対照的に、アバンは微笑んだまま頷いた。
「それはしょうがないですよね。こんなに可愛いお洋服着せてもらったら、嬉しくなっちゃいますものね。
　マァム、よく似合ってますよ。」
「えへへ～。」
　アバンの賞賛に、マァムは、はにかみながら微笑んだ。
「そりゃあ似合うだろう！マァムはうちの天使だからな！！」
　ロカの力強い声が響いた。
　レイラは、アバンに説明をつづけた。
「もう少ししたら、村でも秋祭りがあるんです。
　都の祭りは人が多いですし、マァムみたいな小さい子は連れていけないですけど、村のお祭りでしたら参加できますから。
　そのときに着たらどうですかって、貸してくださったんですよ。
　マァムにはちょっと大きいんで、丈を合わせないと、と思ったんですが。」
　すると、マァムは、ロカに抱きかかえられながら、自分の身にまとったワンピースのスカートをつまんで、力いっぱい主張した。
「マァム、これきるー！！」
「はいはい、わかってますよ。
　本番前に汚しちゃったらダメでしょう。
　今日はすぐに脱ぎましょうね。」
「はーい。」
　母に諭され、マァムはしぶしぶ頷いた。
　ロカがマァムを床に下すと、そのマァムのところに、上空からバケルがおりてきた。
「マァム、カワイイ～。」
　すると、マァムは、とんがり帽子からはみ出た、バケルのつるりとした頭を叩きながら、嬉しそうに答えた。

「バケル、あいがとー！」
　目の前でそんなやり取りが繰り広げられる中、ヒュンケルは、ただ一人、言葉も継げずにいた。
　ヒュンケルは、何も声を掛けられず、マァムを見つめていた。すると、その視線に気付いたのか、マァムがくるりとヒュンケルに顔を向けた。
　幼いマァムは、そのまま、にこっと、微笑んだ。
　ヒュンケルは、ぎくりと身構えた。
　マァムはヒュンケルに駆け寄った。
「にいにっ！！」
　そして、椅子に座ったままのヒュンケルの膝に飛びつき、尋ねた。
「にいに、みてみてー。
　マァム、かあいい？」
「あ・・・いや・・・。」
　ヒュンケルは、耳まで真っ赤に染めて、口ごもった。
　マァムは、椅子に腰かけたヒュンケルの膝に寄りかかり、そこに両手を乗せて、彼を見上げた。マァムの桃色の髪の向こうに、真っ白な羽が見える。純白の衣装は、彼女をより色白に見せ、それがますます愛らしさに華を添えていた。
　普段と様子の異なるヒュンケルにいぶかしみ、マァムは、彼の膝に頭を乗せ、首を傾げた。上目遣いに彼を見上げる。
「にいに？」
「・・・いや・・・その・・・。」
　ヒュンケルが言い淀んでいると、苦笑しながらアバンが助け舟を出した。
「ヒュンケル、マァムが聞いていますよ。答えてあげたらどうですか。」
「・・・えっと・・・その・・・。」
　だが、なかなかヒュンケルの言葉が出ない。
　その彼の様子に、ロカが不満げに声を上げた。
「何だ、坊主、うちの天使がかわいくないとでもいうのか？」
「ロカ。」

レイラが夫をたしなめる。
　マァムは、なかなか返されない返事に、次第に不安になったようだった。マァムが細い声でヒュンケルに呼びかけた。
「・・・にいに？」
　ヒュンケルはうつむいたまま、唇を結んだ。
　すると、レイラが、マァムを呼んだ。
「マァム！もう脱ぎますよ！
　本番前に汚しちゃったらどうするの？」
「はーい。」
　マァムは、するりとヒュンケルから手を離すと、母の元に駆け寄った。
　ロカもレイラに歩み寄り、再び、マァムを抱き上げた。
　レイラは、マァムと話しながら、リビングを出ていこうとしていた。マァムを抱きかかえたロカが、その横に並んだ。
　親子三人の会話が遠くから聞こえてきた。
「もういいでしょう。にいににも見せられたんだしね。」
「うん。」
「父さんも見せてもらったぞ。
　マァム、よく似合っている。」
「うん。
　かーたん、マァム、かあいい？」
「ええ、もちろん。可愛いわよ。」
「当たり前だろう、マァム。」
　ヒュンケルは、座ったまま、一歩も動けなかった。
　遂に、マァムに何も言葉をかけられなかったヒュンケルの前に、オレンジ色の影がすうっと舞い降りた。
「・・・ヒュン、カッコワル。」
「・・・う、うるさい。」
　バケルに視線も合わせられず、ヒュンケルは、悪態しかつけなかった。
　アバンは、苦笑していたが、その笑みを消すと、ヒュンケルに歩み寄った。そして、彼の肩に軽く手を置いた。
「ヒュンケル。」

「せ、先生。」
　ヒュンケルは、戸惑った様子で、アバンを見上げた。その面は、叱られるのを覚悟した子どもの目をしていた。
　アバンは、ゆっくりと、諭すように、ヒュンケルに語り掛けた。
「マァム、かわいかったですね。
　マァムは、あの姿を、あなたにも見てほしかったんですね。」
「あ・・・。」
　リビングを出ていく際のレイラとマァムの会話が、ヒュンケルの耳に残っていた。
　アバンは、ヒュンケルに尋ねた。
「マァムの天使の衣装、どうでしたか？」
「そ、それは・・・。」
「可愛かったです？」
「え、ええ・・・もちろん・・・。」
　真っ赤になってうつむきながら、辛うじてそう答えたヒュンケルに、アバンはあたたかい視線を注いだ。
「うん、あなたがそう思っていることは、顔を見ればわかりました。
　あなたも恥ずかしかったんですね、ヒュンケル。」
「・・・。」
　ヒュンケルは何も答えなかった。
　だが、その態度が、アバンの言葉を肯定していることは、アバンには容易に推測できた。
　アバンは、言葉をつづけた。
「私には、あなたの気持ちはわかりましたよ、ヒュンケル。
　でも、マァムにはどうだったでしょうね。
　あなたが何も答えなかったことで、マァムは、あなたに、かわいいって思ってもらえなかったって、そう感じているかもしれませんね。」
　ヒュンケルは、はっとした顔で、アバンを見上げた。そして、呆然とした面のまま、首を横に振った。
「俺・・・そんなつもりじゃ・・・。」
　アバンは、じっとヒュンケルを見つめると、真剣な眼差しで語り

掛けた。それは、幼い子どもに対する態度ではなかった。
「ヒュンケル。
　ちゃんと言葉にしないと、伝わらないこともあるんですよ。
　特に、マァムはまだ小さい。
　あの子に伝えたことがあるんだったら、ちゃんと言葉にしてあげないといけませんね。」
　ヒュンケルは、アバンの真摯な眼差しを受け、彼もまた、傷付いたような面で目を伏せた。
　そして、呻くように、師に答えた。
「・・・はい。」
　少しすると、着替えが終わったマァムを連れて、レイラがリビングに戻ってきた。
「お持たせしました。」
　アバンは、レイラに尋ねた。
「あれ、ロカは？」
「裏庭に薪を取りに行ってくれました。そろそろ夕食の支度をしますから。」
「すっかりお父さんですね、ロカも。」
　そう言いながら、アバンは、普段着の木綿のサンドレスに着替えたマァムを見て、残念そうな声を上げた。
「着替えちゃいましたか。
　残念ですね、かわいかったのに。」
　そう言いながら、アバンは、マァムに歩みよると、しゃがんで、彼女に視線を合わせた。
「マァム、お祭り当日には、かわいい天使の衣装を着て、うんと楽しんでくださいね。」
「うんっ！」
　アバンの言葉に、マァムは大きく右手を上げ、勢いよく返事をした。
　アバンは、微笑んで、立ち上がると、ヒュンケルに視線を止めた。
　そのまま、そっと呼びかける。
「ヒュンケル。」

少年は、気まずそうな顔をしていたが、意を決したように立ち上がった。
　そして、マァムから離れたアバンとすれ違い、幼い少女に近づいていった。
「マァム。」
　アバンの背後で、ヒュンケルが少女に呼びかける声がする。
　アバンがちらりと背後を見やると、ヒュンケルが頬を染めたまま、マァムの耳元に、唇を寄せていた。
　その声は聞こえなかった。
　だが、途端に、マァムが喜色をあげた。
「にいに～！」
　マァムがヒュンケルの首元に飛びつく。
「うわっ、マァム！！」
「にいに、あいがとー！」
　抱き着いてきたマァムの背に、ヒュンケルが恐る恐る手を回しているのが、アバンの目に映った。
　そこに、オレンジ色のモンスターがふわふわと漂っていった。
　バケルはいたずらっぽさを前面に出した笑みを浮かべたまま、ヒュンケルを冷やかした。
「ヒュン、ヤルゥ～。」
「うるさいっ！！」
　アバンは、微笑みながら視線を前に戻した。
　そうして、誰にも聞こえない声で、そっとつぶやいた。
「私にとっては、皆、天使ですよ。」
　アバンの背後では、小さな天使たちが、顔を合わせて笑い合っていた。